研究ノート
哲学的テクストの翻訳によせて

熊野 純彦

1

たとえば以下のテクストを見てみよう。引用は、E・カッシーラーの『シンボル形式の哲学』第三巻「序論」からのものである（7.Aufl., 1977, S.42f.）。

Die reine Intuition leistet, was der logisch-diskursive Gedanke niemals zu leisten, ja was er, sobald er sich einmal in seiner Natur erkannt hat, niemals auch nur zu erstreben vermag. Versucht man das Wesen des logischen Schematismus allgemein auszusprechen, so findet man, daß er auf den Schematismus des *Raumes* zurückgeht. Alles Begreifen, das hier am Werke ist, vollzieht sich nach der Analogie des räumlichen Erfasssens. … Soll es statt dessen zu einer wahrhaften Einheit kommen, in der Sein und Wissen sich nicht nur gegenüberstehen, sondern in der sie sich wahrhaft durchdringen, so muß es eine Grundform des Wissens geben, die diese Art der Verräumlichung, der Distanz-Setzung überwunden hat.

文意をたどってみる。訳文と原文との対応を確認していただきたい。

純粋な直観がなしとげるのは（Die reine Intuition leistet）、論理的－論証的思考のけっして果たしえないこと（was der logisch-diskursive Gedanke niemals zu leisten … vermag）、そればかりか（ja）そうした思考の本性がひとたび認識されたなら（sobald er sich einmal in seiner Natur erkannt hat）、追求しようとしてもけっしてかなわないことがらである（was er … niemals auch nur zu erstreben vermag）。論理的な図式機能の本質を一般的に言いあらわしてみよう(Versucht man das Wesen des logischen Schematismus allgemein auszusprechen)。そうすれば分かるとおり（so findet man）、その図式機能は空間のそれにさかのぼるものなのである（daß er auf den Schematismus des *Raumes* zurückgeht）。いっさいの概念的把握は（Alles Begreifen）、それがここではたらいているものであるかぎり（das hier am Werke ist）、空間的な把握と類比的なかたちで遂行されている（vollzieht sich nach der Analogie des räumlichen Erfasssens）。〔中略〕こうしたもののかわりに、真の統一がなりたつべきであるとすれば（Soll es statt dessen zu einer wahrhaften Einheit kommen）、つまり存在と知が対立しあうばかりではなく（in der Sein und Wissen sich nicht nur gegenüberstehen）、む

しろ両者が真に浸透しあうような統一がなりたつはずであるならば（sondern in der sie sich wahrhaft durchdringen）、知の一箇の根本形式が存在しなければならない（so muß es eine Grundform des Wissens geben）。その根本形式は、この種の空間化、隔たりの定立を超克したものなのである（die diese Art der Verräumlichung, der Distanz-Setzung überwunden hat）。

カッシーラーは名文家で、明晰で端正なドイツ語テクストを遺したことで知られている。この一文も、ほとんど語順、節順を変えることなく、論理の流れのままに日本語へと移してゆくことができる。

ただし、引用文はカッシーラー自身の立場を表明したものではない。シンボル形式の本源性を主張するこの哲学者が、じぶんの対極にあるものとみなした、ベルクソンの所論をまとめたものである。フランス語圏でいえば、そして、ほかならぬこの論敵こそが当時、もっとも端正で明晰な文体によって哲学的著作をあらわしたひとりなのである。

カッシーラーが相手どった主張に対応するテクストを引く。「形而上学入門」の書きだしである（『思考と動くもの』PUF, p.177f.）。これも一文の流れを跡づけてみよう。

Si l'on compare entre elles les définitions de la métaphysique et les conceptions de l'absolu, on s'aperçoit que les philosophes s'accordent, en dépit de leurs divergences apparentes, à distinguer deux manières profondément différentes de connaître une chose. La première implique qu'on tourne autour de cette chose; la seconde, qu'on entre en elle. La première dépend du point de vue où l'on se place et des symboles par lesquells on s'exprime. La seconde ne se prend d'aucun point de vue et ne s'appuie sur aucun symbole. De la première connaissance on dira qu'elle s'arrête au *relatif*; de la seconde, là où elle est possible, qu'elle atteint l'*absolu*.

形而上学についてのさまざまな定義、絶対的なものをめぐる考えかたのさまざまを比較してみれば（Si l'on compare entre elles les définitions de la métaphysique et les conceptions de l'absolu）、気づかれることがある（on s'aperçoit que）。それは、哲学者たちが一見したところでは示している違いにもかかわらず（en dépit de leurs divergences apparentes）、かれらは一致して（les philosophes s'accordent）、事物を認識する、根本的にことなるふたつの手つづきを区別している（à distinguer deux manières profondément différentes de connaître une chose）ということである。第一の手つづきがふくんでいるのは（La première implique）、その事物の周囲をまわるということ（qu'on tourne autour de cette chose）である。いっぽう第二のそれは（la seconde）、事物の内へと入りこむことを（qu'on entre en elle）ふくんでいる。第一の手つづきは、私たちが取る視点と、表現にもちいられるシンボルとに依存している（La première dépend du point de vue où l'on se place et des symboles par

lesquells on s'exprime)。第二の手つづきは、どのような視点も採用することなく（La seconde ne se prend d'aucun point de vue)、シンボルに依存することもない（et ne s'appuie sur aucun symbole)。第一の認識については（De la première connaissance)、それは相対的なものにとどまる認識であり（qu'elle s'arrête au *relatif*)、第二のそれにかんしては（de la seconde)、そういったものが可能な場合には（là où elle est possible)、絶対的なものへと到達しようとする認識である（qu'elle atteint l'*absolu*)、と言えるだろう（on dira)。

カッシーラーとベルクソンには、それぞれの思考と、それを表現する言語の差異を超えて、たがいにかよい合うところがある。両者のテクストでは、思考の流れと論理の骨組みが、文章の構造そのものと一体化しているのだ。

こうしたテクストの翻訳には、独特な快楽がともなう。その快楽は、とはいえ、つねに直接的に得られるものとはかぎらない。

2

ドイツ語を母語とする、おそらくこれもまた名文家といわれてよい著作家のテクストを引く。K・レーヴィット、第一作からの一節である（*Sämtliche Schriften*, Bd.1, S.69)。

Die herrschende Idee einer objektiven Beurteilug anderer durch *Absehen* von sich selbst ist zufolge der grundsätzlichen Unterscheidung der andern von einem selbst eine prinzipiell illusionäre Fehltendenz. Auch die Verhältnisse der andern untereinander lassen sich nicht ohne Rücksicht auf das einheitliche Verhältnis meiner selbst zum einem wie zum andern beurteilen. Wäre die Beurteilung anderer wirklich und nicht nur der Theorie nach "selbstlos", so könnte sie die andern weder für sich noch untereinander beurteilen. Die wirklich mögliche Objektivität in der Beurteilung anderer wird durch keine illusionäre Selbstlosigkeit, sondern durch das ausdrückliche Einbeziehen seiner selbst in die Beurteilug anderer gewährleistet.

原題は *Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen*, 直訳すれば『共に在る人間の役割における個人』、現在では『共同存在の現象学』という邦題であらためて邦訳されている。ハイデガーが主著を出版したその翌年、師の所論を批判する意図をもこめて公刊された、教授資格請求論文である。

引用した部分では、評価の客観性という問題が、この著者に特有な moraliste 的視線をともなって論じられている。注目しておきたいのは、第一文である。かりに、旧訳を示しておく（『人間存在の倫理』理想社版、102 頁)。

自分自身を無視して他の人々を客観的に評価をするという支配的な考えは、他の人々を或る一人の人自身から原則的に区別した結果生まれた、一つの原理的に幻想的な欠如傾向である。

佐々木一義氏の邦訳は、ドイツ語独特の表現に充ち満ちたレーヴィットの一書をこの国の言語に移そうとした、尊敬すべき労作である。とはいえ、くだんの一文はすこし据わりが悪く、すくなくとも筆者には分かりにくい。

原文を見なおしてみる。第一文の主語は Die herrschende Idee einer objektiven Beurteilug anderer durch *Absehen* von sich selbst である。ドイツ語としてはまったく違和感がない。しかし、これをそのまま直訳的に日本語に移せば、やや不自然となる。

拙訳では、この主語を一文として訳してみた。あらためて直訳すると、「他者の客観的な評価はじぶん自身の度外視によってなりたつ、という支配的な考え」という主語を独立の文としたわけである。拙訳を引く。第二文目以降の訳も、あわせて示しておく（岩波文庫版、139 頁）。

他者の客観的な評価にさいしては、じぶん自身を度外視することが必要であるという考えがいきわたっている。けれどもそれは、他者を一者自身から原則的に区別するところから生じる、原理的には幻想的で、あやまった傾向である。一方ならびに他方に対する私自身の統一的な関係を考慮しなければ、他者たち相互の関係もまた評価されえない。他者たちに対する評価が、たんに理論的にそうであるばかりでなく、現実的にも「無私」のものであったなら、その評価は他者たちをそれぞれ評価したものとはならず、他者たちを相互に評価するものともならないだろう。他者たちの評価において、現実に可能な客観性が保証されるのは、幻想的な無私性によってではない。他者の評価のうちに、じぶん自身を明示的に関係づけることによってである。

哲学的なテクストの場合であれば、構文のレベルで原文の味わいを再現することは、ときに読者をいたずらに混乱させることになる。レーヴィットには、例に引いたような文章が頻出するけれども、前年に出版されたハイデガーの『存在と時間』では、さほど目につかない構文である。また、本稿の冒頭に引いたカッシーラーの著作でも、ほとんど存在しない文例であるように思われる。だから、哲学分野でのドイツ語文献でしばしば見うけられるとはいえないが、英語、フランス語とくらべて、ドイツ語のテクストにやや特徴的な文体であるとは言ってよいだろう。

現代日本語では、形容詞句・形容詞節的な表現があまり発達していない。あるいは副詞句・副詞節についても、そうかもしれない。たとえば『源氏物語』の文体を考えてみれば、古典語についてはかならずしもそうではないこともわかる。この件は、現代日本語における「一文の長さ」に一定の制約を課していることになると思われる。

3

悪文の実例を引く。例は、古典中の古典とされるものから採ることにしよう。カント『実践理性批判』からの引用である（*Gesammelte Schriften*, Bd.5, S.107）。

Die reine Vernunft hat jederzeit ihre Dialektik, man mag sie in ihrem spekulativen oder praktischen Gebrauche betrachten; denn sie verlangt die absolute Totalität der Bedingungen zu einem gegebenen Bedingten, und diese kann schlechterdings nur in Dingen an sich selbst angetroffen werden. Da aber alle Begriffe der Dinge auf Anschauungen bezogen werden müssen, welche, bei uns Menschen, niemals anders als sinnlich sein können, mithin die Gegenstände, nicht als Dinge an sich selbst, sondern bloß als Erscheinungen erkennen lassen, in deren Reihe des Bedingten und der Bedingungen das Unbedingte niemals angetroffen werden kann, so entspringt ein unvermeidlicher Schein aus der Anwendung dieser Vernunftidee der Totalität der Bedingungen (mithin des Unbedingten) auf Erscheinungen, als wären sie Sachen an sich selbst (denn dafür werden sie, in Ermangelung einer warnenden Kritik, jederzeit gehalten), der aber niemals als trüglich bemerkt werden würde, wenn er sich nicht durch einen *Widerstreit* der Vernunft mit sich selbst, in der Anwendung ihres Grundsatzes, das Unbedingte zu allem Bedingten vorauszusetzen, auf Erscheinungen, selbst verriete.

第一文については問題はない。いちおうセミコロンの前後で分けて考えておく。

純粋理性は、いつでもみずからの弁証論をともなっている（Die reine Vernunft hat jederzeit ihre Dialektik）。それは、純粋理性がその思弁的使用において考察されようと、実践的使用にあって考察されようとかわらない（man mag sie in ihrem spekulativen oder praktischen Gebrauche betrachten）。

多くの研究者なら、「純粋理性は、それがその思弁的使用において考察されようと、実践的使用にあって考察されようと、いつでもみずからの弁証論をともなっている」と訳すことだろう。筆者はあえて、原文の順番を崩さないかたちで訳しておいた。これは、『実践理性批判』のような文体を日本語に移すとき、こころみられてよい工夫であるし、じっさい第二文のような、息の長すぎる一文を訳出するさいには、それが有効な方策であることがはっきりすると思われる。

セミコロンのあと、理由を示す部分にうつる。これもまず問題がない。

それというのも、純粋理性は条件の絶対的全体性を、与えられた条件づけられたものに対して要求し（denn sie verlangt die absolute Totalität der Bedingungen zu einem gegebenen Bedingten）、しかも、この全体性は端的に物自体そのものにおいてのみ見いだされることができるからである（und diese kann schlechterdings nur in Dingen an sich selbst anget-

roffen werden)。

問題は第二文である。文全体の構造自体は、それほど入り組んではいない。Da aber 以下、全体の半分弱、angetroffen werden kann までが理由を挙示し、so entspringt 以降がその帰結を提示している。方針どおり、あたまから考えてみる。

まず前半である。節の全体は、mithin で切れ目があり、切れ目に先行する部分では、Anschauung を関係代名詞 weche にみちびかれた節が修飾していることだけ、あらかじめ注意しておく。

ところで事物についてそのすべての概念は直観に関係させられなければならず（Da aber alle Begriffe der Dinge auf Anschauungen bezogen werden müssen)、その直観は、私たち人間のもとでは感性的なもの以外ではだんじてありえない（welche, bei uns Menschen, niemals anders als sinnlich sein können)。したがって、対象は物自体そのものとしてではなく、たんに現象として認識されるにすぎないのであって（mithin die Gegenstände, nicht als Dinge an sich selbst, sondern bloß als Erscheinungen erkennen lassen)、条件づけられたものと条件とが現象のなかで有する系列にあっては、無条件的なものはけっして見いだされることができない（in deren Reihe des Bedingten und der Bedingungen das Unbedingte niemals angetroffen werden kann)。

つぎに後半である。原文の条件・修飾関係を無視して内容だけ注目すれば、ふくまれている主要な論点が三つある。第一に、以上の帰結として、或る Schein が生じること、第二に、その Schein を Kritik があきらかにすること、第三には、Kritik があきらかにすべき当の Schein は、理性の Grundsatz のいわば誤適用から生じる、ということにほかならない。以上を念頭におき、これもあたまから考えてゆく。

それゆえ、避けることのできない仮象が、条件の全体性（かくてまた無条件的なもの）という当の理念を現象へと適用するところから生じてくる（so entspringt ein unvermeidlicher Schein aus der Anwendung dieser Vernunftidee der Totalität der Bedingungen (mithin des Unbedingten) auf Erscheinungen)。それはつまり、現象があたかも事象自体そのものであるかのような仮象なのである（als wären sie Sachen an sich selbst)。（現象は、批判の警告を欠く場合であればいつでも事象自体そのものとみなされるからである denn dafür werden sie, in Ermangelung einer warnenden Kritik, jederzeit gehalten)。この仮象が欺くものであることは、とはいえだんじて気づかれることがなかっただろう（der aber niemals als trüglich bemerkt werden würde)。もしもその仮象が「無条件的なものをあらゆる条件づけられたものに対して前提とする」という理性の原則を、現象そのものに適用するさいに生じる理性のじぶん自身との抗争によって暴露されることがなかったならば、である（wenn er sich nicht durch einen *Widerstreit* der Vernunft mit sich selbst, in der Anwendung ihres Grundsatzes, das Unbedingte zu allem Bedingten vorauszusetzen, auf Erscheinungen,

selbst verriete)。

訳文をつなげて、拙訳を示す。以下のとおりである（作品社版、278 頁）。

純粋理性は、いつでもみずからの弁証論をともなっている。それは、純粋理性がその思弁的使用において考察されようと、実践的使用にあって考察されようとかわらない。それというのも、純粋理性は条件の絶対的全体性を、与えられた条件づけられたものに対して要求し、しかも、この全体性は端的に物自体そのものにおいてのみ見いだされることができるからである。ところで事物についてそのすべての概念は直観に関係させられなければならず、その直観は、私たち人間のもとでは感性的なもの以外ではだんじてありえない。したがって、対象は物自体そのものとしてではなく、たんに現象として認識されるにすぎないのであって、条件づけられたものと条件とが現象のなかで有する系列にあっては、無条件的なものはけっして見いだされることができない。それゆえ、避けることのできない仮象が、条件の全体性（かくてまた無条件的なもの）という当の理念を現象へと適用するところから生じてくる。それはつまり、現象があたかも事象自体そのものであるかのような仮象なのである（現象は、批判の警告を欠く場合であればいつでも事象自体そのものとみなされるからである）。この仮象が欺くものであることは、とはいえだんじて気づかれることがなかっただろう。もしもその仮象が「無条件的なものをあらゆる条件づけられたものに対して前提とする」という理性の原則を、現象そのものに適用するさいに生じる理性のじぶん自身との抗争によって暴露されることがなかったならば、である。

カントの原文は、現代ドイツ語を規準とすればあきらかに悪文であり、カント自身の他のテクスト、たとえば『判断力批判』とくらべても、だれがみても難文である。上で挙げた一節は、しかも最悪の実例というわけではない。

この思考の文体を、そのまま再現することはとうぜん断念せざるをえない。必要な操作は、原文を厳密に論理的に解析し、意味上の関係を確定したうえで、いくつかの文章にくぎって訳出することである。ただし、さきにもしるしたとおり、こんかい筆者としては、ドイツ語原文の順序については、可能なかぎり再現をこころみた。カントの思考はやはり、ほぼ原文の語順、節順のとおりに展開しているように思われたからである。これは、ある種の哲学的テクストの翻訳にあっては、一般に必要なところであるかもしれない。

4

哲学的テクストの翻訳にあって、考えどころのひとつは、どの箇所にどのような訳注をつけておくか、だろう。筆者の場合、たとえば『純粋理性批判』には内容的な注をほ

とんど付さなかったが、逆のケースもある。まずテクストを引く。レヴィナス『全体性と無限』の末尾ちかくからの引用である（Nijhoff, p.258）。

La distance à regard de l'être par la fécondité, ne se ménage pas seulement dans le réel; elle consiste en une distance à l'égard du présent même qui choisit ses possibles, mais qui s'est réalisé et a vieilli d'une certaine façon et qui, par conséquent, figé en réalité définitive, a déjà sacrifié des possibles. Les souvenir, à la recherche du temps perdu, procurent des rêves , mais ne rendent pas les occasions perdues. La vraie temporalité, celle où le définitif n'est pas définitif, suppose donc la possibilité, non pas de ressaisir tout ce qu'on aurait pu être, mais de ne plus regretter les occasions perdues devant l'infini illimité de l'avenir.

訳注のつけかたがここでの論点だから、原文の読みは問題としない。当該部分の拙訳をまず引いておく（岩波文庫版（下）、221-222 頁）。なお、訳文では une distance à l'égard du présent の部分を二重に訳している。

多産性によって獲得される、存在からの隔たりは、たんに実在的なものと折りあうものではない。隔たりは、ほかならない現在への隔たりである。現在は、さまざまに可能なことがらを選択する一方で、すでに実現され、ある意味ではすでに老いている。したがってこの現在は、決定的なものとなった現実のうちで凍りつき、さまざまに可能なものをあらかじめ犠牲にしてしまっている。多産性による隔たりは、このような現在からの隔たりなのである。失われた時をもとめる回想によって夢は手に入れられるけれども、失われた機会の数々はとりもどされはしない。真の時間性においては決定的なものが決定的ではなく、真の時間性とは、したがって、ひとがそのようにもありえたすべてをふたたびつかむ可能性を前提するものではない。未来という制限のない無限のまえで、失われた機会をもはや哀惜せずにすむ可能性を前提するものである。

レヴィナスのような著作家の翻訳に訳注を付するさいに困るところは、本文における先行テクストへの言及がしばしば非明示的であり、しかも多くのばあい不正確で、そのうえ恣意的でもあることだ。筆者は、一重の下線部二か所に訳注をつけておいた。

第一の箇所が、ベルクソンの『意識に直接あたえられたものをめぐる試論』の一節を念頭に置いていることは、若き日のレヴィナスの偏愛した哲学者がベルクソンであったことを知り、ベルクソンのテクストにいくらか通じている者なら、だいたい想像がつく。——邦訳ではながく『時間と自由』という（英訳経由の）題名で親しまれてきた著作の一節を引いておく。じっさいに訳注で言及しておいた部分である（PUF, p.7）。

Ce qui fait de l'espérance un plaisir si intense, c'est que l'avenir, dont nous disposons à notre

gré, nous apparaît en même temps sous une multitude de formes, également souriantes, également possibles. Même si la plus désirée d'entre elles se réalise, il faudra, faire le sacrifice des autres et nous aurons beaucoup perdu. L'idée de l'avenir, grosse d'une infinité de possibles, est donc plus féconde que l'avenir lui-même, est c'est pourquoi l'on trouve plus de charme à l'espérance qu'à la possession, au rêve qu'à la réalité.

二重線を引いた最初の部分がいちおうのインデクスともなっている。内容的にみれば、より注目すべきところは、ベルクソンの所説とレヴィナスのそれとのあいだに存在するある種の捻じれであるかもしれない。

旧著『西洋哲学史　近代から現代へ』でも引用しておいたので、拙訳で引いておけば、こうなるだろうか。

希望というものを、かくも強い歓びにしているものは、私たちが思いのままに手にしている未来が、ひとしく微笑むかのように、ひとしく可能なものとしてさまざまなかたちで私たちにあらわれるからである。それらのうちでもっとも切望されたものが実現されたとしても、残りのものは犠牲にされるのだから、私たちは、多くのものを失うことになる。無限に可能なものであふれた未来の観念は、未来そのものより豊かである。所有よりも希望に、現実よりも夢想に、いっそうの魅惑が見いだされる、これがその理由なのである」（岩波新書版、212 頁）。

問題は第二の下線箇所である。原文の à la recherche du temps perdu がプルーストの長編への連想を誘うものであることについては、疑いを容れない。問題は、レヴィナスがここで、『失われた時をもとめて』のどのような一節を思いうかべていたか、にある。

こうした推測の確度を問うこと自体が困難だろうけれども、筆者としては、つぎの箇所であると考えている。根拠のひとつは、これも二重下線を引いておいた regretter という語、もうひとつの根拠は、全体の雰囲気とでもいうほかはない。まず原文で引用しておく（Pléiade, tome 1, p.419）。

La réalité que j'avais connue n'existait plus. Il suffisait que Mme Swann n'arrivât pas toute pareille au même moment, pour que l'Avenue fût autre. Les lieux que nous avons connus n'appartiennent pas qu'au monde de l'espace où nous les situons pour plus de facilité. Ils n'étaient qu'une mince tranche au milieu d'impressions contiguës qui formaient notre vie d'alors; le souvenir d'une certaine image n'est que le regret d'un certain instant; et les maisons, les routes, les avenues, sont fugitives, hélas, comme les années.

こちらは、吉川一義氏の近業から、訳文を拝借する（岩波文庫版（２）、518-519 頁）。

私が知った現実は、もはや存在しなかった。スワン夫人が、同じすがたで同じ時刻にやって来ないというだけで、もう大通りはべつのものになったのである。われわれの知った場所は、われわれが便宜上それを位置づけている空間世界に属するだけではない。それは、われわれの過去の生活を構成するさまざまな印象がつみ重なったひとつの薄い層にすぎない。あるイメージの想い出とは、ある瞬間を哀惜する心にほかならない。そして残念なことに、家も、街道も、大通りも、はかなく消えてゆくのだ、歳月と同じように。

さきのベルクソンの一節も、このプルーストも、筆者が偏愛する一節である。訳者のその嗜好自体が、原文の読みを左右している可能性はあえて否定しない。

*

2015年に『判断力批判』の新訳を出版する予定で、それがおわった時点で翻訳からは足を洗うつもりでいた。じっさい、哲学的テクストの翻訳は、それが改訳であれ、一種の苦行めいたところがある。ところが人間というものは（あるいは筆者にかぎられるのかもしれないが）懲りないもので、先日、かねて義理もある書肆から、ヘーゲルの『精神現象学』の新訳を、という提案があり、うかうかと引きうけてしまった。

『現象学』には有名な（あるいは悪名たかい）「序文」がついている。書きだしもまた、よく知られているところだろう。いちおう引用しておく（Suhrkamp, S.11）。

Eine Erklärung, wie sie einer Schrift in einer Vorrede nach der Gewohnheit vorausgeschickt wird — über den Zweck, den der Verfasser sich in ihr vorgesetzt, sowie über die Veranlassungen und das Verhältnis, worin er sie zu anderen früheren oder gleichzeitigen Behandlungen desselben Gegenstandes zu stehen glaubt —, scheint bei einer philosophischen Schrift nicht nur überflüssig, sondern um der Natur der Sache willen sogar unpassend und zweckwidrig zu sein.

ヘーゲルはこう書いたのち、数十頁におよぶ「序文」を書いているわけである。新旧の既訳をならべてみよう。この部分だけでも、両者のコントラストがはっきりあらわれているのが、興味ぶかいところである。

金子武蔵氏訳：著作に序文において先立たされるのが習慣のようになっている説明は——著者が著作において企てた目的に関するのであり、また〔彼が執筆するに至った〕もろもろの動機や同一の問題に関する前代及び同時代の諸論著に対して立つと彼が信ずるところの関係についてのものであるが、——このような説明は哲学的な著作の場合にはただに余計であるだけではなく、〔哲学的真理という〕事柄の本性から言って不適切でさえあり、また目的に反するように見える（岩波書店版、３頁）。

長谷川宏氏訳：一巻の書物のはじめに「まえがき」なるものを置き、その書物で著者のねらいとする目的がどこにあり、また、同じ対象をあつかう前代や同時代の作品にどう刺激を受け、どう新境地を開いたかを説明するのが慣例のようになっているが、そうした説明は、哲学書の場合、不必要であるばかりか、事柄の性質上、不適当で不都合であるとさえ思える（作品社版、1頁）。

この稿でその一端にふれてきたような立場から、筆者自身はこの部分を、以下のように訳出しておく予定である。各種の判断は、読者のかたがたにゆだねたい。

なんらかの説明が、著作といったものには、「序文」のなかで習慣上さきだって与えられているものである。——それは、著者が当の著作のなかでくわだてた目的を説明するものであったり、ならびにまた〔著作を著わすにいたった〕さまざまな機縁や、おなじ対象を論じている、先行し、あるいは時代を共にする論考に対して、その著作が立っているものと著者が信じる関係を説明しようとするものであったりする。——そうした説明は、哲学的な著作の場合には余計であるばかりか、ことがらの本性からして不適切ですらあるのであって、さらには目的に反するものであるかに見える。

数年はかかる作業となるだろうから、全体の訳出をおえるころには、筆者も60歳に手がとどく年齢になる。いささか私事にわたる消息であるけれども、1981年、筆者が倫理学専修課程を卒えるさい卒業論文として提出した論攷は、ヘーゲルのいわゆるイエナ草稿群と『精神現象学』にかかわるものだった。30余年の歳月ののちに、じぶんの勉強もようやくひとつの円環を閉じることになりそうな予感がしているところである。

国境の越え方

柳原 孝敦

はじめに

カレン・カプランが言うように、移動（亡命、旅など）が近代の比喩として機能し、さらにはモダンの様々な変種としてのポストモダニティの様態をも肯定しているのなら〔カプラン 2003: 49; 77〕、亡命や単なる旅ではない移動は近代以外の比喩たりうるだろうか？　あるいは、モダニティやポストモダンの概念を強化するものとして持ち出されてきた従来の旅の理論が考慮に入れなかった類の移動は、果たして新しい時代や新しい時代概念に対応するのだろうか？これがこのささやかな研究ノートの出発点である。ここに言う「新しい時代概念」とは、たとえば、「グローバル化」、「グローバリズム」のことである。

というのも私は、かつて、ラテンアメリカ文学における詩の潮流モデルニスモは、言うところのモダニズムに他ならず、その典型的にモダニズム的な精神が「ラテンアメリカ」という概念と呼称を定着させるのに一役買ったのだと主張した〔柳原 2007: 特に第２章〕からである。そのとき私は、ラテンアメリカで進行しつつある市場のブロック化の後に、ラテンアメリカが文化的にひとつにまとまった共同体であるという主張（ラテンアメリカ主義）がどのような変質を被るのかを見極めることを今後の課題として残した。それに対する応答、あるいは少なくともその一部となるべきものを私はまだ見出していないが、少なくとも近年の文学作品に描かれる移動は、私が以前扱ってきた作家や詩人たちの移動（亡命や外交官としての異動）とは異なるもののように思われる。それがグローバル化の時代の問題点に呼応しているようにも思われるので、ここで少し整理してみたいと思った次第だ。

ここではとりわけ、米墨国境の越え方に焦点を絞って見ていこう。

1 やすやすと国境を越える人々　アルベルト・フゲー『ミッシング』

1-1　アルベルト・フゲーについて

アルベルト・フゲーに注目するのは、彼がチリの作家であり、同時に反マジックリアリズム、